

# みおしえ

生きがいのある生活

ひいらぎ



——— 埼玉教区浄土宗青年会 ———

# 甘露

長伝寺 大和田康内上人

Mさんは、二年前に最愛の奥さんに先立たれ、暇を見付けては墓参りに行っていた。

Mさんの墓地は共同墓地で、行くたびごとに気になることがあった。それは、墓地の出入り口の鉄の門が、真っ赤に錆びていたことであつた。

〈誰かがペンキを塗るだろう〉そう思つて今日まで来た。ところが、一向に誰もする様子がない。そこでMさんは、思ひきつて自分ですることに決めた。誰に頼まれた訳ではないし、なんの得にもならないけれど自分でやろうと思ひ立つたのでした。

先ず、ワイヤーブラッシで丹念に錆を落とし、自前でペンキを買つてそれを塗つたのです。その日は汗でMさんのメガネがくもり、時にはしずくがレンズに落ち、あるいは、掛けられているメガネが汗でずり落ちてくるほど暑い日だつたようだ。

それでもなんとか最後までやり遂げようと、手拭きでしたたる汗を拭いながら作業をしていると、背後から

「暑いのにご苦労様です。どうぞ一杯めしあがってください」という声が出て、見ると差し出されたおぼんに上には、麦茶が入ったコップがのつていた。コップから水玉がしたたり落ち、おもわず両手が合さつて、イッキに飲み干した。

「いやー。そのときの味……。なんともいえない味でしたねえー。麦茶なんてものは味気ないものと思つていたけど、実に旨かつた。それにしても、見ず知らずの方がご馳走してくれるなんてねえー。塗り終わったこともそうだけど、気持ちの良い一日でしたねえー。」

炎天下汗まみれで無心に仕事をしている人がいて、そんな人の姿に心打たれて、わざわざ自宅の冷蔵庫から冷たく冷えた麦茶を運んできて、ご馳走してくれた人がいた。ほとけさまの心で仕事をしている人の姿は、周りの人の心をその汗で浄め、ほとけさまの心にしてしまう力を持っているのでしようか。

『花の香りは風に逆らつては進んでいかない。』

梅檀もタガラの花もジャスミンもみなそうである。

しかし徳のある人々の香りは、風に逆らつても進んでいく。徳のある人はすべての方向に薫る。』

(法句経 第五十四)

# 人として

法性寺 酒井 宏典上人

私は生きている。私は生かされている。今ここに存在する私は変わりはないが、「生きている」と意識するのは「生かされている」と意識するのでは生き方に大きな違いがある。喜怒哀楽が変わってくる。前者は哀楽が多く、後者は喜怒哀楽が多い。暮らしの中でいうならば、「する」と「させていただく」である。もつと極端に言えば、「してやる」と「させていただく」となる。この意識の違いが自分を変える。行動をおこすとき、たとえば、「仕事をしよう」か「仕事をさせていただけよう」か。行動を終えたとき「世話をした」か「世話をさせていただけいた」か。違いは行動中にもあるが、結果と自分自身での評価に大きく現れる。結果が良かったときはいいが、良くなかったとき、どう思うことになるだろうか。前述の前者は…となるのではないだろうか。考えてみると、「する」は我が強く、欲がからみ、怒りや哀しみの誘因となる。「させていただく」には感謝

の心が含まれている。自分がいて周りに人がいるのか、周りに人がいて自分があるのか。自分の存在は人間としての命を自分で創造したのではない。両親からいただいたのである。すなわち、自分の始まりは「いただく」なのである。人間が地球上に出現して以来、先祖代々の「いただく」がくりかえされてこの世に存在している。そして「いただく」命は両親がいても、思いどおりに創造されるものではない。見えない不思議な力によって両親が授かる。逆に人間としての命が終わる日も自分では知ることができず、やはり、見えない不思議な力によって往生する。この見えない不思議な力が仏の力である。周りの人々も仏の力によって存在し、その人々との出会いをいただいたのも仏の力である。つまり私は仏の力のおかげで生かされているのである。こう考えてみると、自分勝手なわがままな「する」、「してやる」という欲の見え隠れする生活は恥ずかしい。いただいた命を大切に、「いただく」という感謝の心を育んで、人としてのゆとりを持った、和やかな生活を、仏の力の中にさせていきたい。



# 木 魚 (もくぎょ)

木魚は木魚鼓、魚鼓、魚板とも言うております。木製で円形（魚形）、中空、横に細長い穴を通し、表面に魚鱗を彫刻してある打ち物で、仏具の一種です。はじめは、衆人を集める時にたたいて鳴らす道具の「魚板」から変化したのですが、後には読経や念仏をお唱えするときの拍子を整えるために打つようになりました。

なぜ魚の形なのか。これにはいろいろな故事がありますが、一説には、魚は昼夜目を閉じることがないことから、「つねに目覚めて精進せよ」と怠惰、惰眠を戒めるために、その形を木に刻んでこの形の鼓を打ったともいわれております。

中国の明の時代に頭と尾とが相接する団円の形をとるようになり、さらに後世には、玉鱗・一身二頭の竜頭の形となってきました。竜頭魚身は「魚化して竜となる」との故事から「凡より聖に至る」の意味です。

日本で用いられるようになったのは、十七世紀に隠元禅師が中国から伝来してからです。浄土宗の打ち方は、お経を読むときは前に二つ、最後に三つ、中間は字と字の合い間に打ちます。間(あいだ)打ちと申しております。これをある医師が、精神安定の巧みな方法であると説いていました。

## 編集後記

▼今号は、ベテランの大和田上人と若手の旗頭酒井上人という魅力的な組み合わせとなった。両上人に厚くお礼を申し上げたい。

▼「生きがい」を辞書でひくと「生きていくことに意義・喜びを見出し感じる、心の張りあい」とあった。日本人の平均寿命が延び、第二の人生をいかに生きるかが問われる今日、生きがいを持つことは何よりも大切である。それは特別な物や所にあるのではなく、ごく身近にあつて、そのことに我々自身が気づかないだけだと、両上人はいわれているのかもしれない。

千三三五

埼玉県戸田市中町二―四―十一

『みおしえ』編集室代表 渡辺 昭彦

龍光山不退院  
常福寺